

審査の結果の要旨

氏名 渡邊 大志

本研究は明治以降、1980年代にいたる近代東京の港湾を巡るさまざまなステーク・ホルダーの動向を丁寧に読み解きつつ、当該地域の都市史の変遷を水と陸の境界に立地する「1倉庫」という存在を鍵言葉として明らかにしたものである。従来、都市史の分野では港町研究として蓄積されてきたが、主として空間や社会集団を単純化して論ずるものが多いなかで、本論は会議録などの一次史料を博捜し、異なる利害をもつさまざまな力学のせめぎ合いにまで踏み込んで、さらに「失敗」とされてきた東京の近代港の歴史にもうひとつの新たな歴史解釈の道筋を見いだした点に意義がある。な試金石となっている。

本論は序章において既往のトルコ建築史・都市史研究の回顧と展望を行ったのち、本論文のねらいが述べられる。

本論は大きく本論となる4つの章と別立ての附論からなり、本論の前後は研究史・研究視角を示した「はじめに」と全体を総括した「おわりに」によって挟まれる。

「はじめに」において、著者はいかに従来の港町研究が港そのものの構造に踏み込んでいない点を指摘しつつ、「倉庫」という水と陸のライン上に位置する存在の物的あるいはメタ概念的な存在を港のインフラとして捉え、その「配布」構造から港町（ここでは東京港）を捉え直す重要性を強調している。また世界にさまざまに存在する港のなかで、巨大都市メガロポリスにおける港の特異性についても注意を喚起している。

第一章は明治期の東京築港計画を再考する。東京の築港問題は近代東京の負の部分としてつねに失敗計画として捉えられてきたが、著者はこの解釈に大筋において同意するものの、むしろ第二章で取り扱う大井埠頭の整備が戦後を俟たねばならない前提条件が明治期の築港計画の推移のなかに内在していた点を明らかにした。すなわち品川沖と隅田川口で揺れ動きつつ頓挫した東京築港計画の歴史の変遷は逆説的に隅田川口の重要性を明示したのである。

つづく第二章が本論の中核をなす部分である。第二章ではそれまで陸と海の接続ラインが不明確であった東京に対して、戦後はじめて埠頭という境界が挿入される過程を膨大な議会資料などの一次史料を駆使して論じた、渾身の一章である。世界はすでにコンテナリゼーションが広範に普及しており、その世界的物流システムから取り残されていた東京はコンテナ導入とセットで東京大井の埠頭建設に踏み切る。この港湾の構造変化はそれまでの利権関係や空間構造を根底からリセットするほどのインパクトを内在していたのであつ

て、コンテナ埠頭建設を巡って数多くのステーク・ホルダーたちは自らの権益の保存と拡大に狙って複雑な駆け引きが行われる。最終的には「若狭裁定」と俗称される妥協案によって埠頭建設が実現するが、本論はこのプロセスをきわめて丁寧に追跡し、港が本来的に有する力学関係のあり方と空間構造を捉えたところに新規性が認められる。

第三章はコンテナリゼーション成立後の東京港の現代都市化のプロセスが取り扱われる。具体的には1980年代のバブル経済の膨張とともに喧伝された世界都市としての東京がとりわけ東京ウォーター・フロント論として展開した。本章では世界都市博の中止とともに退潮していく東京港論が、逆に次の章の青海埠頭の問題を準備したという著者独自の見解を提示している。

第四章は世界都市博と臨海都心構想の焦点となった青海埠頭の都市博中止後の動きを追跡した部分である。進歩と発展の夢に浮かされた東京港はふたたび現実に戻り、着実に埠頭機能を中心とした港本来の姿をとりもどしていく。このように本論は第一章-第二章、第三章-第四章がそれぞれ対となった構造で叙述されており、近代以降の東京港の変転を単なる成功か失敗かという二律背反的なとらえ方ではなく、弁証法的転生として描き直した点に大きな特徴があり、それが本論の現代都市へのメッセージともなっている。

附論は現在、アメリカなどを中心として急展開する物なき物流の動向を睨みつつ、都市本来の存在形態へと回帰する方途に言及が加えられている。

以上、本論は明治の東京築港問題の失敗としてしか捉えられてこなかった東京港の都市史的過程を明治-戦後-昭和後半という3つの時代を通じて捉え直した、東京都市史の重要な貢献である。分析に収集された史料は膨大な数に達し、これらにすべて目を通しつつ冷徹な視線で東京港の都市史を描ききった力量は大いに評価できる。すなわち東京都市史に新境地を拓いた研究であり、博士（工学）にふさわしい業績と評価することができる。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。